

聖書 詩編第23篇

- 1 主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。
- 2 主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われる。
- 3 主はわたしの魂をいきかえらせ、み名のためにわたしを正しい道に導かれる。
- 4 たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れません。
あなたがわたしと共におられるからです。あなたのむちとあなたのつえはわたしを慰めます。
- 5 あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設け、
わたしのこうべに油をそそがれる。わたしの杯はあふれます。
- 6 わたしの生きていくかぎりは必ず恵みといつくしみとが伴うでしょう。
わたしはとこしえに主の宮に住むでしょう。

聖書 エフェソの信徒への手紙1章3～7節

03 わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。04 天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。05 イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。06 神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。07 わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。

説教 『天のあらゆる霊的な祝福で満たされて』

◆今朝このように共に召天者記念礼拝を捧げ得ますことを嬉しく思いますと共に、心から神様に感謝を捧げたく思います。日頃はそれぞれの教会で礼拝を捧げ、過ごしております私たちが、年に一度、この11月の第2聖日に集められ、記念礼拝を捧げ、記念会を持ち得ますことは、楽しみであり、喜びであります。今日は久しぶりに、礼拝堂一杯に皆さんの顔が溢れておりますので、本当に嬉しく思います。

◆今日は記念礼拝に引き続き、記念会を持つのでありますが、私にとっては私事的でもあるのですが、皆さま、今日の週報をご覧くださいませでしょうか。諸報告の7)にこのように記させていただきました。<去る11月10日(木)教会のご配慮のもと弟・森田義則(1948・3・21～2016・11・8)の葬儀を教会で行わせていただきました事を心から御礼申し上げます(牧師森田幸男)。>以上のような次第でありまして、去る木曜日にこの礼拝堂で葬儀を行わせて頂きました。68歳でした。近頃の言い方ですと「家族葬」的な仕方です。弟森田義則の葬儀をさせて頂きました。家族・肉親と、親友の方と教会の姉妹2名で行いました。長老の皆様には連絡だけさせて頂きましたが、教会の皆様には「連絡網」を使ってのお知らせは控えさせて頂きました。その様な次第でありまして、一階の記念会場に遺影も飾らせていただいております。「召天者」の新人であります。宜しく願い申し上げます。

◆そのような次第でありますので、少しわたくし事を織り交ぜながら、しかしまた神様に召された者でもありますので、少し話させていただこうと思います。弟の病状につきましては以前にもお知らせする機会がありましたが、教会では春と秋に特別伝道集會を致しますが、春に案内も送っておりましたが、伝道集會の日も近づきましたので、電話をしましたところ、「腰がいとうて、歩かれへんねん」という返事でした。それから、四か月位前に近くの病院に入院して検査を受けました所、結局、「転移性肝腫瘍」という診断で、癌が背骨に転移して

いて、それによる腰痛という事でした。本人・家族・肉親も揃う中での主治医の告知でした。最早、緩和治療しか為す術がなく、長期医療型の病院に転院して40日、8日に召されたのであります。わたしは5人姉弟で、年子の姉は9年前に、テレビや新聞でも大きく報道されるような事件に巻き込まれて亡くなりました。姉も68でした。そして私が長男で、すぐ下の弟は今日も出席しております。そして「義則」で、一番下が妹です。その様な次第でありまして、火曜日に遺体が教会に運ばれて来まして、木曜日葬儀を行い、長柄橋の北斎場で火葬に付したのであります。兄弟でありますので、入院の前から、入院してから、その経過を見て来ました。これまで肉親や教会の兄弟姉妹も多く、天に送ってまいりましたが、今回程、闘病の姿から、白骨と化すまでの経過をつぶさに見たのは初めてという気が致します。

◆今朝も、司会の石橋雅子長老から、「弟さん、残念でしたね」と、言って頂いたのですが、家族も、私たちも、病気がはっきりしてからでも、出来る事は何でもして、もう一度元気になってほしいと願い、色々、あの手この手を考えたのですが、やはり、病院に入院しますと、病院にお任せするしかなく、緩和治療的・対症療法しかなく、その経過を見守り、徐々に弱って行きました。

◆弟には二人の娘がおりまして、長女の成美ちゃんは26歳、次女の胡美ちゃんは中学一年の13歳です。だから私たちも胡美ちゃんの成人式までは元気でいてほしいと願いましたし、本人はそれ以上にその事を願っていたに違いありません。しかし、火曜日に68歳で召されたのであります。ですから、このようにして愛する者を送った家族にとっては、その悲しみ、淋しさ、喪失感を、近くで見るわけですがけれども、そして、私自身、一時願った、「奇跡」は起こりませんでした。けれども、今回わたしは、奇跡に優る、神様の恵みを、頂きました。それは、あの『伝道の書』の3章11節にある御言葉、「神のなされることは皆その時にかなって美しい」ということなのです。私たちにとっては、「どうして、このような事が起こるのか」ということは、多々あるのですが、しかし、神様が為さることは、一つの例外もなく、皆、神様の御心に適い、従って、本当に神様の善きご計画の中で起こっているのだという事を、私たちは、後になって気付くのですが、今回わたしは、「神のなされることは皆その時にかなって美しい」という事を、再確認させられました。

◆先ほど申しましたように、二人の娘がいるのですが、実は、弟は最初は会社務めだったのですが、その会社は、学校の教科書や卒業アルバム等を制作する会社だったのですが、そのアルバム部門をはずすことになったので、それを受けて、自分で会社を作り、やって来たのです。それで、成美ちゃんがお父さんの手伝いをしており、実は、お葬式の日になった木・金と、天下茶屋小学校の修学旅行に成美ちゃんが同行することになっており、まさかお父さんがそんなに早く逝くとは思っていなかったものですから、代わりを頼むことも出来ず、成美ちゃんはお父さんのお葬式には出られなかったのです。まあ、これが仕事の厳しさですね。だけれども、妻の久美さん、成美ちゃん、胡美ちゃんの3人は、ずーっとお父さんに寄り添って、看病して来たのですね。長い看病はする方も大変ですね。本人も必死の闘病をしているわけです。その必死さは、家族には痛いほど分かります。しかし、その必死な闘病の姿を見ているのも辛くなりますね。その様な経過をたどり、天に召されたのであります。

◆先ほど、「奇跡は起こらなかったけれども、奇跡に優る恵みをいただいた」と申しましたが、それは、どういう事かを申し上げねばなりません。今日、礼拝のはじめに司会者が「招詞」として詩編第117篇を読まれました。これはこの数年変わることなく、この御言葉で礼拝を始める慣わしです。〈すべての国よ、主を 賛美せよ。すべての民よ、主をほめたたえよ。主の慈しみとまことはとこしえに。わたしたちを超えて力強い。ハレルヤ。〉これは、詩編150篇の中で、最も短い詩編ですが、その内容は壮大であります。この詩編については北教会では繰り返し話して来たのですが、〈主の慈しみとまことはとこしえに、わたしたちを超えて力強い〉というのは、一つの訳ですが、意味は二様です。一つは、「主の慈しみと真とは、

常に、私たち人間の理解を遥かに超えている」という意味と、もう一つの意味は、「主の慈しみとまこととが、常に、とこしえに わたしたちを力強く覆っている」ということです。つまり、神様の慈しみの眼差しと見守りは、ただのひと時も私たちから離れることはないということです。ですから、私たちがこのような神様の御愛の視線を忘れることはありません。しかし、神様が、私たちを、その善き御心をもって、絶えず見守っていて下さるということは、これは永久に変わらない事実なんですね。このことは、クリスチャンならば誰しも納得するところだと思えます。

◆しかし今回わたしが、「奇跡に優る恵み」と言いましたのは、生前、本人も、家族のことを思い、必死に闘病する姿を見て来たわけですね。しかし、力尽きて亡くなりました。それならば、その亡くなる時というのはどういう時かと云えば、それは、ヨハネによる福音書14章1～3節にありますように、召される者のために、天の住いが用意された時なのです。イエス様はこうっておられます。「14:01 心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。 14:02 わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。 14:03 行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」

◆それで、わたしは改めて思ったのですが、聖書における神様の御言葉、イエス様の御言葉は、本当なんですね。どの一つも、例外なく、真実なんですね。ですからこの度の、弟の逝去、召天も、イエス様が、天に弟の住まいの用意ができたから移して下さったのです。それで、ここまでは、わたしはこれまでも、そう信じて、母も送り、姉も送り、主にある兄弟姉妹も送って来ました。しかし、今回、わたしが、「ああ、そうだったか」と、思い知らされたのは、この地上に生きているときに、本人は家族のことを思い、必死に戦っているのです。死力を尽くして、病と闘っているわけです。しかし、力尽きて、亡くなるわけです。そして、天に移されます。そして、天からは神様とイエス様が私たちを絶えず見守っていて下さるわけです。しかし、今回の私の発見というか、気づきは、天に召された者は、この地上においてさえ、家族の為に、必死に、もう一回、立ちあがろうと、元気になろうとして、戦って、力尽きたわけでありました。しかし天に移ったら、今度はどうなるかと思ったら、神様、イエス様と一緒に、なお地上の歩みをする私たちのことを、片時も忘れることなく、見守ってくれる、そのような存在に変わるんですね。ですから、ですから、私たちは、神様に見守られる、イエス様に見守られている、ということは、これまでも信じて来ました。しかし、天に召されたわたしたちの肉親、兄弟姉妹達もですね、今度はイエス様と一体になって、なお地上で色々なことで、悩み、苦しみ、迷う、私たちのことを、地上にあった時以上の思いをもって、見守ってくれているのだと云うことを、気付かされたのです。

◆私は、高校3年のクリスマスに洗礼を受けましたので、それから、57～8年経ちますが、神様、イエス様に頼むのは当然ですが、その御許に召された、もう数限りない信仰の先達というか、信仰の仲間、肉親・家族たちが、私たちを見守り、応援を続けていてくれるのです。ですから、私たちを見守り、包んでくれているのは、神様・イエス様だけではなくて、肉親の視線、愛情が降り注がれている中に、私たちの人生があるのだという事に気付かされたのです。ヘブライ人への手紙12章1節～3節にこうあります。「12:01 こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、 12:02 信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。 12:03 あなたがたが、氣力を失い疲れ果ててしまわないように、御自分に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい」と。先に申し

ましたように詩編 117 篇が内包するものは壮大であります。主の慈しみとまことと常に私
たちを包んでいるのだ。これは永遠に崩れないのだ。ハレルヤ！と言っているのですが、こ
の中に、先に召された人たちも共にいて、わたしたちに愛情を降り注いでしてくれる。その
事を、今回、わたしは発見できたのです。そう思われた次第であります。

◆讚美歌の 120 番も、実は詩編 23 篇をもとにした讚美歌です。この讚美歌も毎週と言
ってよいくらい、私たちは歌います。そして、詩編の 103 篇も毎週交読しています。どうか、
皆さんも今日の記念の礼拝の週報を保存しておかれまして、今日の週報に出ている聖書の個
所を、折ある毎に、読み返して、その恵みに与っていただきたく思います。私たちの人生に
は耐え難いようなことがありますね。しかし、そのような時も、神様の恵みと慈しみは崩れ
ないのです。それで、讚美歌 120 番の 4 節にこうあります。「死の陰の谷に行く時にも、
災い恐れじ。主、共に居ます。」ですから、わたしたちは、本当に孤独地獄に陥ることもあ
るのです。自業自得ということもあるんですね。けれども、そのような死の陰の谷に行く時
にも、主は、共に居て下さるのです。この詩編 23 篇で、言われていることが、本当にそう
なのだという証人たちは、紀元前の昔から、紀元後の今日に至るまで、夥しい数の証人たちが、
「そうなのだ！」と言ってくれています。自分が蒔いた種の結果を刈り取らなければならない
ことをしてしまったのだけれども、その時にも、主は共に居て下さいました事を経験した
人々が、この詩編 23 篇を「わが歌」にして来たのですね。ですから、そのような証人たち
にもわたしたちは見守られているのです。人生、いつ何が起るかしれませんが、何があつ
ても挫けないで、生きてください。終る

◆それでもう一つの事を申し上げて終わろうと思いますが、使徒パウロはロマ書の 8 章 31 節～
32 節でこのように言っております。これはわたしの愛唱聖句でもあるのですが。「もし神が
わたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。 08:32 わたしたちす
べてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわ
たしたちに賜らないはずがありませんか。」神様にとって一番大切な、御独子、イエス様の
命をさえ、私たちの救いの為に犠牲にして下さったのですから、その他のいかなるものでも
下さらないはずがありません、とパウロは言っております。それが、今日のエペソの信徒へ
の手紙ですと、3 節、「わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられま
すように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくだ
さいました」と、パウロは言い換えております。ですから、本当にわたしたちはお金に困
ることもあるんですね。ですけれども、その暗い、辛い所をも通り、越えないといけない、
試練なんですね。試練は、私たちを谷底に引きずり込むためにあるものではありません。その
どうにもならない所を越えて、何が起きても崩れない真実なものに目覚めて行くのですね。
そして、イエス様によって、わたしたちは天のあらゆる霊的な祝福で満たされて行くのです。
私たちが何者であっても神様は私たちを見捨てることは絶対になさいません。このような神
様とイエス様の愛の顧みと、そして神様と一緒にになった御許に召された人たちの溢れる思い、
愛情の下に、私たちの日々があるのですね。このことを新たに覚えて、なおしんどい時もある
でしょうが、恐れしないで、共に歩んでまいりましょう。

◆お祈りいたします。

恵みに満ち給う主イエス・キリストの父なる神様。あなたは私たちを常に、永遠に顧みて
居て下さいます。そして、今、あなたの御許に召された兄弟姉妹、肉親のことも思いながら、
御前に礼拝を捧げておりますけれども、先に召された一人一人が、私たちが忘れる時にも、
私たちのことを忘れず、常に私たちのために、主と共に、愛情と声援を送り続けていてくれ
ることを、新たに覚えて、感謝いたします。そのような恵みと愛情を覚えながら、その期待
にそう所の人生の日々を歩ませてください。

この祈り、主イエス様の御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン。